

北川とも

TOMO KITAGAWA • PRESENTS

白雪りる

RIRU SHIRAYUKI • ILLUSTRATION

息も
できないほど

IKI-MO DEKINAIHODO





「あっ、あっ、嫌っああ」抱き締められ、深々と秀二のものを呑み込まされる。嗚咽を洩らし、昌樹は許してくれるよう、懸命に首を横に振って懇願する。顔に携帯電話が押し当てられ、寛の音が聞こえてきた。「秀二っ、お前、椎名に何してるんだっ。椎名っ、椎名っ」「かけ、い、さ……」

息もどきないほど

《立読み版》

北川 とも

イラスト 白雪 りる

目の前で^{かけいしゆうじ} 秀二が、満面の笑みを浮かべている。^{しいなまさき} 椎名昌樹は半ば呆れながら、野性味たつぷりの秀二の顔を眺める。

「……嬉しそうだね、お前」

昌樹の言葉に、秀二は外見を裏切って、子供のように素直に頷く。

「嬉しいんだよ、本当に」

「あっそう」

毒気を抜かれそうになりながら、昌樹は頼んだアイスコーヒーにミルクを入れる。ストローで混ぜて、視線を通りに向ける。

春と言うには強烈な、だけど夏と言いつてしまうには穏やかな陽射しが、通りを歩く人々へと降り注いでいる。

昌樹が社会人となって一カ月以上になる。その間、会社での新人研修などの行事が忙しくて、季節の移り変わりになど目を向ける余裕もなかった。とりあえず、春は終わってしまったらしい。

この先数カ月、また忙しいだろうなと思うと、無意識にため息が洩れていた。

「どうかした？」

テーブルから身を乗り出すようにして、秀二が顔を覗き込んでくる。

「いや……。おれ来週から一年間、別の会社に出向することになったんだよ」

「出向？」

現在、大学の二回生である秀二には、まだピンとこない言葉だろう。昌樹ですら、初めて聞いたときは、首を傾げたぐらいなのだ。

挑発的とも艶っぽいとも言われる目を細め、昌樹は苦々しい表情を造ってみる。

「新入社員の何人かは、うちが出資してるいくつかの会社に、出向って形で研修に出されるんだよ。それでおれにもって……」

「もしかして、椎名さんが行く会社って、遠いわけ？」

「遠かったら、今頃お前とこうして、のんきにコーヒー飲んでるわけないだろ」

「だったら近いんだ」

くつきりとした目鼻立ちと、それを際立たせる不揃いに伸びた髪の色いで、秀二は一見、剣呑とした雰囲気を見せた男に見える。もっとも話してみると、外見を大きく裏切って、子供っぽい部分もある。

そんな秀二はなぜか、三つ年上である昌樹になついている。

昔からの知り合いというわけではなく、初めて言葉を交わしてからまだ一年ほどだ。大学四回生であつた昌樹が大学の構内を歩いていると、新入生であつた秀二が場所を尋ねてきたのが初対面だつた。そのときから、秀二の人懐こさは発揮されている。

見た目の大きなギャップを見せた秀二は、大きな動物がじゃれてくるように昌樹にまわりついてきたのだ。気がつけば昌樹は、秀二をつれて歩くようになっていた。

この一年、もつとも長い時間を共に過ごした人間は、考えるまでもなく秀二だろう。ストローを唇に挟むと、秀二がじつと見つめてくる。

「何だ」

「近い？」

にっこりと笑いかけられる。さきほどの話の続きらしい。

「……ああ。通勤時間そのものは、そんなに変わらないな。うちの広告や宣伝関連の仕事は、その会社が全部手がけてるって言うてたから。社員同士、仕事の打ち合わせとかで、けっこう行き来してるみたいだし」

持っている手帳からボールペンを抜き取り、昌樹は紙ナプキンに出向先の会社名と住所を書いてやる。

「へえ」

紙ナプキンに視線を落とした秀二が意味深に頷いたので、昌樹は気になって尋ねる。

「どうかしたのか？」

すると秀二は、間髪置かずに答える。

「ちよっとね。……滅多にない偶然もあるなと思って」

「何だ、それ」

「椎名さんと俺って、やっぱり運命の赤い糸で結ばれてるかもってこと」

「お前と、運命について語り合ったことはないぞ」

指先を秀二の顔に突きつける。その指をそつと掴まれた。

「これから、話し合ってみる？ 俺はいつでもOKだから」

憎たらしいほどの真顔で言われる。本当に呆れた昌樹は、再びストローを唇に挟み、答えを避けた。

エントランスホールに入った昌樹は、慌ただしい人の行き来に流されそうになりながら、周囲を見回す。

いきなりの出向命令だったため、ここを訪れたのは初めてだった。

近代的な、まだ新しいビルで、二階から五階までの四フロアを、昌樹の出向先である会社は使用している。昌樹の配属先である営業部は、その三階だ。

「……階段で行くか」

エレベーターの前は、出勤時刻のためひどく混み合っている。

昌樹と同じように入社間もない社員なのか、スーツや制服姿のどこかぎこちない男女が、ちらほらと見える。

昌樹はくせのない髪をかき上げて、階段のほうに向かった。

うつむき加減で階段を上がっていると、視界の隅に、階段を走り降りてくる人影が入った。相手は考えごとをしていたらしく、手すり側を歩いていた昌樹に気づいていなかった。

「あっ……」

走ってきた人物の肩と、強くぶつかる。階段から片足を滑らせ、昌樹はバランスを崩し、咄嗟に手す

りを掴みはしたものの、体が後ろに倒れそうになるのを堪え切れない。

ぐいっと強い力に腕を掴まれて引っ張られ、昌樹も本能的に、手を伸ばした先にあったものに掴まる。目の前を、何枚もの書類が鮮やかに舞っていた。昌樹は一瞬、その光景に目を奪われる。次いで視界に飛び込んできたのは、間近から自分の顔を覗き込む、男の鋭い目だった。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

息もできないほど

《立読み版》

発行日 2011年12月30日

著者名 北川 とも

イラスト 白雪 りる

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Tomo Kitagawa 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。